

縄紋時代早期 -押型紋土器の広域編年研究-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2018-11-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岡本, 東三 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/19732

「博士学位請求論文」審査報告書

審査委員 (主査) 文学部 専任教授

氏名 阿部 芳郎 ㊞

(副査) 文学部 専任准教授

氏名 藤山 龍造 ㊞

(副査) 國學院大學文学部 専任教授

氏名 谷口 康浩 ㊞

1 論文提出者 岡本 東三

2 論文題名 縄紋時代早期押型紋土器の広域編年研究
(英文題) A Study on cross-Regional Chronologies of the Pottery with
Surface Impressions in Initial Jomon Japan

3 論文の構成

本論文の構成は以下の通りである。

序章

第1章 東北の押型紋土器—北の日計式土器—

はじめに

第1節 戦後、新しい縄紋起源論をめざして

第2節 日計式土器押型紋土器の前と後

第3節 日計式・三戸式・細久保2式の互換性

第4節 日計式押型紋土器の編年的位置

第5節 貝殻・沈線紋土器出現期の問題点

おわりに

第2章 関東の押型紋土器—異系統としての押型紋土器—

はじめに

第1節 捺糸紋土器と押型紋土器

第2節 捺糸紋土器のなかの押型紋

第3節 捺糸紋土器から沈線紋土器へ

第4節 沈線紋土器の細分と押型紋土器

おわりに

第3章 中部の押型紋土器—樋沢式土器・細久保式土器—

はじめに

第1節 樋沢式土器の再検討

第2節 細久保式土器の細分

第3節 細久保2式押型紋と三戸3式沈線紋

第4節 中部沈線紋土器の出現と展開

第4章 西日本の前半期押型紋土器その1—大鼻式土器・大川式土器—

はじめに

第1節 大鼻式土器の編年的位置

第2節 大川式土器の編年的位置

第3節 西部ネガティブ押型紋と立野式成立の事情

第4節 大川式・立野式と東部押型紋との対比

第5章 西日本の前半期押型紋土器その2—神宮寺式土器・桐山和田式土器—

はじめに

第1節 神並遺跡11層と12層の評価

第2節 神宮寺式土器の再吟味

第3節 桐山和田式土器の理解

第4節 北白川廃寺下層式土器の理解

おわりに

第6章 西日本の前半期押型紋土器その3—北白川廃寺下層式土器—

はじめに

第1節 東部押型紋文化圏への交差の旅

第2節 旅たちの前に—そのガイドライン—

第3節 細久保2式からの旅立ち

第4節 細久保2式から北白川廃寺下層式へ

おわりに

第7章 西日本の後半期押型紋土器その1—黄島式土器・高山寺式土器—

はじめに

第1節 瀬戸内海の成立と押型紋

第2節 小蔦島・黒島・そして黄島

第3節 中・四国における押型紋土器の変遷

第4節 高山寺式土器をめぐって

第5節 穂谷・相木式と判ノ木山西式の関係

おわりに

第8章 九州島の押型紋土器—押型紋土器と円筒形貝殻文土器—

はじめに

第1節 いわゆる「大分編年」について

第2節 押型紋土器の出現前夜

第3節 九州島における押型紋土器の変遷

第4節	大分編年後半期の再編成
おわりに	
第9章	押型紋土器の終焉—手向山式土器と穂谷・相木式土器
はじめに	
第1節	手向山式をめぐる九州島の押型紋土器事情—
第2節	手向山式の型式学的分析
第3節	本州島の穂谷式・相木式
第4節	おわりに
終章	総括と展望
	引用文献

4 論文の概要

本論文は縄文時代早期の押型紋土器の広域土器編年研究である。縄文時代早期には押型紋土器と呼ばれる彫刻原体を回転施文する特徴的な装飾技術を持つ土器群が広域に分布する。これらの土器群はこれまでも彫刻原体の文様と施文手法から編年的な研究が進められてきたが、土器群の系統的变化や地域間の年代的関係、さらには地域間相互の交渉関係についてはなお不明な部分が多く残されている。

本論ではこれらの問題を中心的な課題として取り上げ、日本列島を東北地方・関東地方・中部地方・西日本・九州島の5つの地域に区分して各地域の詳細な型式変化を分析した。

東北地方では日計式押型紋土器の分類と編年を進め、その起源に中部地方の押型紋土器の影響を想定し編年を整備した。その根拠は信州地方の細久保2式土器と日計式および関東地方の三戸3式のキメラ土器の存在に求めた。

関東地方は撚糸紋土器が主体となり、その終末段階に押型紋土器は異系統土器として存在する状況を指摘し、独自の変化を遂げる押型紋土器の在り方を明らかにした。なお、申請者は撚糸紋土器と沈線紋土器の間に草創期と早期の区分を設け、さらに撚糸紋土器と沈線紋土器の間に無文土器の存在を想定する既存の土器編年に対しては異論を唱え、無文土器の単独時期を認めずに沈線紋土器への変遷を考えている。

中部地方では樋沢・細久保式系と立野系の2系統の押型紋が存在し、立野式系押型紋土器は西日本の押型紋土器の影響を受けた異系統の型式とした。押型紋土器の出現は関東地方以外の回転施文の縄文土器に由来することを指摘し、その系譜と由来を推測した。また変遷の後半段階では細久保式系が残存するとした。押型紋の終末段階では西日本の穂谷式の影響を受けるとともに、東北地方の貝殻沈線紋土器が波及し独自の型式が成立する状況を整理した。

西日本の状況は5型式の連続的な型式変遷によって説明され、押型紋土器の最古の年代は関東地方の撚糸紋土器後半段階の稲荷台式に求めている。さらに中部地方の押型紋土器との併行関係を見通し、西日本最古の押型紋土器である大鼻式は中部地方の樋沢1式土器と併行関係にあるとした。また関東地方・東北地方が貝殻・沈線紋土器に変化した後にもなお、押型紋土器が継続するのは西日本・九州地方の特性でもあることが指摘されている。

続く九州地方の編年では、押型紋土器の出現時期が西日本よりも遅れる状況が明らかにされ、その理由に在地型式の円筒形貝殻紋土器の存在が指摘され、初期の押型紋土器は西日本からの波

及による異系統土器として存在したことが述べられている。

以上のように日本各地の土器編年に再検討を加え、それらを広域土器編年として整理したのちに終章では本論の主題となる押型紋土器の広域分布圏の形成と終焉の意義を検討する。押型紋土器は文様原体の回転施文によっているが、それらが沈線紋土器へと変化するのは単なる文様の変化としてではなく、縄紋土器の装飾史として評価し、東日本では押型紋（関東地方では撚糸紋土器）から沈線紋土器へと変化するのに対して、西日本・九州地域では押型紋の終焉が時期的に遅れ、条痕紋土器へと変化する大きな2つの異なる変遷の過程が存在することを指摘し、広域な分布圏を形成した押型紋土器の成立背景と地域型式への変遷の過程を詳細に論じている。

5 論文の特質

本論文は地域間における土器型式の併存関係の検証に、土器の出土状況の検討と共に、異型式土器の属性が共存するキメラ土器を手掛かりにして年代的な併行関係を求め、精緻な土器編年を構築している。さらにまた、キメラ土器が出現する背景として地域間に開かれた関係の存在を読み取り、そこに地域的独自性と親和性が共存する縄文社会の特徴を指摘している。

そして本研究を広域化と地域化を交互に繰り返して変遷する縄文土器の特質を解明するためのケーススタディとして位置づけ、縄文社会の構造性を指摘した。また100型式にも及ぶ多数の土器型式を時空間に位置づけ、隣接型式との関係を論じている点は類を見ない労作というべきである。

6 論文の評価

縄文土器の型式編年学的な研究は、戦前・戦後を通じた研究の蓄積により、地域別の精緻な土器編年が確立しつつある。しかし、任意の空間で区切られた地域編年のみでは、広域に起こった地域間の交渉関係の実態にせまることはできない。この問題を解決するためには、地域編年を統合し、型式相互の系統的關係を縦横に整理した広域土器編年網の確立が重要な前提をなす。本論文がもっとも評価される点は、こうした課題を意識して広域土器編年の確立に果敢に挑んだ点である。そしてその結果として、縄文時代早期における広域な地域間関係を解明した点は高く評価される。

一方、本論文の各章において詳述された土器編年の細部には、出土状況の把握、土器群の系統的な変化の理解、土器付着炭化物を用いた炭素年代との整合性等の点について、より検証が必要な箇所が指摘できるのも事実である。しかし、これらの問題点は今後の出土事例の蓄積や研究の展開によって解明されるべき課題であり、むしろこの課題を追求することによって、本研究の重要性は益々高められることになるであろう。こうした問題を先鋭化し、広域土器編年の構築を一定の水準で成し遂げた点は特筆に値する。

7 論文の判定

本学位請求論文は、本学学位規程の手続きに従い、審査委員全員による所定の審査及び試験に合格したので、博士（史学）の学位を授与するに値するものと判定する。

以 上